林屋辰三郎の芸能研究における「環境」概念の再考

相原　進
（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

本研究の目的は、林屋辰三郎の芸能研究における主要概念である「環境」について、今日のスポーツ人類学からの再考を試みることである。

本研究で取り上げる林屋辰三郎および「環境」概念について示す。林屋は日本の芸能研究、とくに日本芸能史において理論的支柱となるとともに、芸能史という研究領域の発展において重要な役割を果たした。林屋は日本の芸能研究について、民俗学の折口信夫による芸態に着目した研究と、歴史学の岩橋小弥太よる文献資料を通じた研究の流れがあるとした上で、とくに芸能を取り巻く「環境」から芸能史を考察することを提案した。芸能史研究においては前者を「芸態論」、後者を「環境論」として整理され、林屋およびその後進の研究者などにより、これらの流れを統合する試みがなされてきた。林屋の「環境」概念は複合的な要素で構成されており、「環境」を育成させた条件として「自然的条件」「政治的条件」「思想的条件」を挙げ、「環境」の基盤について「文化を荷担する階級なり階層なりの究明、文化自体を社会的・経済的に解析」する方針を示している。さらに「環境」の背景として「国際的視野を含めて綜合的に、文化の創造される歴史の舞台を考える」ことを提唱している（林屋 1947）。

発表者はこれまで林屋の芸能研究の方法に関する考察をおこなってきた（相原 2009 他）。林屋に着目した理由はもともと私が日本の芸能を研究していたことにある。日本の芸能を研究する場合、日本の資料をもとに日本人によって構想された研究方法を応用したいという理想があった。当初、私は日本をフィールドとしており、発表者自身も日本の言語や文化の影響から逃れきれないことを自覚した上で、より自分自身やフィールドの人びとに近い言語・感覚をもとにした方法の構築を目指したかった。そのような構想のもとで出会ったのが林屋の研究方法であった。

これまで芸能研究では林屋の方法がたびたび取り上げられることはあったものの、領域を超えた広がりを持つには至っていないと思われる。しかし今日のスポーツ人類学などにおけるさまざまなトピックとの関連にまで視野を広げて、たとえば存在論的転回における「環境」との比較や、林屋が芸能の特徴として示した「数奇性」と情動論との比較など、林屋の方法について「環境」を軸に再考すると、先駆的な部分もあれば、開拓の余地もあることが見えてくる。本研究では林屋の「環境」概念を軸にそのテクストの読み直しを試みると同時に、今日的な文脈での再考・再評価を試みたい。

（参考文献）

相原進（2007）「日本の芸能研究における視角と方法に関する考察―『環境論』と『芸態論』を中心として」『立命館産業社会論集』第 43 巻第 3 号、pp.61-77.

林屋辰三郎（1947）『日本演劇の環境』大八洲出版（＝再録：林屋辰三郎（1986）『「座」の環境』淡交社）.

林屋辰三郎（1981）「序章」藝能史研究会編『日本芸能史 1　原始・古代』法政大学出版局，pp.1-18.